

審査の結果の要旨

論文提出者氏名

ガルシア モンテイル エミリオ
Garcia M. Emilio

本論文は、大正12年の関東大震災で壊滅的な打撃を受けた銀座が、その後第二次世界大戦までの間、いかにして東京、あるいは日本の中心的繁華街として成長を遂げたかを、当時の資料を駆使しながら明らかにしたものである。本論は単に銀座の都市史をクロノロジカルに追跡するのではなく、その背景となる銀座の空間・社会・都市民衆・政治権力に広く目配りし、最終的に銀座の近代史を見事に描き出した。

第1章では、銀座の地形・空間に着目し、銀座が「島」としての特異な性格を帯びるプロセスを震災後の橋の架橋と町名の変化から明らかにしている。

第2章では、銀座四丁目交差点と数寄屋橋という銀座地域のなかでもとりわけ重要な2つのノード(Node)を取り上げる。「水の空間」「境界の空間」の数寄屋橋に対して、銀座四丁目交差点は「陸地の空間」「中心の空間」であった。数寄屋橋は新聞社や日劇、邦楽座、泰明小学校が集中するひとつのコンプレックスであって、銀座の象徴的な意味合いを醸成していた。メディア・娯楽・インテリゲンチヤの街という銀座の複合的なイメージはこの数寄屋橋コンプレックスから生み出されたものとする。また後者はそれと対照的に、消費・大衆文化のイメージを紡ぐ特異点としてきわだってゆく。

第3章では、銀座区域のいくつかの対象を通して銀座の「プライド」が抽出される。当時、銀座地域の各町は「銀座」あるいは「大銀座」という地名をつけることに意欲を見せるが、その目的は銀座の統一性を見せるというよりも、ビジネスの成功のために「銀座」という地名の象徴的な意味を得ることが目的だった、とする。またこの分析のなかで、銀座は誕生当時から明治政府によって合法化された(legitimated)空間であったことを示している。この指摘はきわめて斬新で、本質をついている。つまり近代化の光の部分が相乗的に銀座地域に降り注いだということになる。このことは銀座の「プライド」が単なる地域の住民だけから形成されたのではなく、さまざまな要素が相互に働いていたことをよく示している。

第4章では、以上の3章の分析を受けて、銀座の人々や風俗に目を向ける。銀ブラとモガと政治権力のシンボルとしての銀座。銀ブラとflâneurを比較して、復興のころの「夢のホーム」として銀座。銀ブラとモガは、カフェ、デパート、表通り、ショーウィンドーの「舞台」と違って、銀座を消費することの「俳優」であった。また銀ブラとモガの概念を宣伝することは、微妙な人々の行為の統制と戦略な「分類」であったと指摘する。この統制も「夢の銀座」を「非公開、informal」の政治がその背景にあった。戦争の時この「夢の銀座」は「国の銀座」になって、軍隊のためのパレードの空間になって、「舞台」を戦争の宣伝で飾ることになるのである。

以上の4章からなる分析を通じて最終的な結論として、筆者は象徴としての銀座空間の特質を「交流」(negotiation)という概念でまとめることができるとする。「島」状の空間的特異点を下敷きとして、近代機能、ビジネス、消費などがさまざまに「交流」するなかで、銀座のプライド・象徴が形成された。そして、繁華街、盛り場として、銀座は「夢のホーム」になって、同時に、「社会的な統合」と「社会的な幸福」の象徴にもなった。それゆえその空間を守るのに「非公開政治」で銀座は統制された。しかし、それとともに政治権力の象徴としての銀座は、「合法的」空間になった。銀座のプライドの意味はそこに存するという。

このように、本論は古地図・行政資料はもとより、当時の雑誌・新聞記事・銀座の一般向けの書物など、実に広い範囲の資料を駆使して、銀座の都市社会史を実証的に、しかもいきいきと描き出した労作であって、近代都市史の分野における既往の銀座研究に対して著者独自の新たな銀座像を構築することに成功した。よって、本論文は博士(工学)の学位請求論文として合格と認められる。